天王洲運河沿いを歩いている。とうに夜は更け、向こう岸に建つマンションやビル群の生活の灯りが綺麗な夜景をつくり出している。いつ見ても綺麗なものだ。

五年ぶりの来訪でもそう思った。

コンクリートの道路よりもやや低い位置に造られたレンガの歩道を歩いて行った先にささやかな白色の灯りに照らされた、赤色の小さな橋を見つけた。最後に見た時はブルーシートで一部が覆われていて何やら工事をしていたが、今はその様ではない。僕はレンガからコンクリートに上がり。その小さな橋を渡る。相変わらず、幅の小さな橋だった。歩行者二人と乗用車一台がやっと通れるほどの、幅だった。

橋を渡り、右に折れる。そしてすぐそこの階段からレンガの歩道に下る。こちら側から見る向こう岸に立つのは商業ビルが多く、見える限りではそのすべてが行儀よかった。ほとんどのビルが完全に消灯していた。

そのまま歩いていると目を惹く警告灯を灯した一隻の船が見えた。ぼんやりと、その上に立つ人の姿が見えた。今夜は寒い。水上であればなおさらそうだろう。

「……おつかれさまです」

聞こえるはずのない声量でぽつりとつぶやくだけでなく、ちいさく頭を下げる。無論、なんの反応もあるはずがなかった。当然のことだった。

またそのまま歩いて行くと、さっき渡ったちいさな橋とは違い、きれいにライトアップされたそれなりの大きさの橋が見えた。それとその先には黄色と青の光を発する水門も。

思っていたより人影が少ないのを見て、思わず足取りが早まった。

ここは大学生の頃に見つけた穴場であり、何度も、何人に対しても使った想い出の場所だった。久しぶりの帰省の前に立ち寄ってしまうくらいには想い出深かった。

橋を渡っていると一組のカップルが橋からすこし身を乗り出してそこから見える夜景を楽しんでいた。なんとなく、かつての自分と姿が重なり、ちいさく息が漏れた。

それでも止まらず橋を渡り切る。渡り切った先は木張りがされていて、左を見ればベンチがいくつか並び、右を見れば雰囲気あるレストランがある。かつてはベンチとそこから見る夜景に興味があったが、もう今は金に余裕があるし、ひとりだ。僕はレストランに入った。

予約していた窓際のテーブル席に通される。座る前に上着とマフラーと手袋を預ける。ひかれた椅子に座り、ウェイターが何か言うよりも先に「とりあえず渋い白を一杯、その後は料理に合うワインをグラスでそれぞれの料理につき一杯ずつ頂きたい」と注文する。ウェイターは快諾し、キッチンの方へ戻っていった。

店内に流れる音楽は『月の光』だった。いつもは好んで聞く音楽だが、今日は孤独をより深められているような気がしてなんだか嫌だった。しかし独りでいるのを選んだの結局のところ自分なのだからその気持ちを受け止めた。

窓の外に見える夜景はいつかの日と何も変わらないはずだったが、妙に寂しかった。